

にしむら
西村

きよおみ
清臣 (1812~1879)



歌人。儒者。松山城下(現、松山市)出身。幼くして文武を学び、絵画、彫刻に秀で国学に造詣が深かった。特に和歌を好み、石井義郷を師と仰ぎ、江戸の海野遊翁、香川景樹にも学んで地方歌人として名を成した。ある時、「蟻を詠んだ長歌並短歌」を遊翁に送って添削を請うたところ、「萬葉集に入るとも愧ぢず」と嘆称された。義郷亡きあとは、藩内の和歌を志す者は皆、清臣の門をたたいたという。明治6(1873)年、京都の皇学所助教となり教務省から中講義に補せられた。西山(松山城の西にある小高い山)の姥桜を詠んだ「かげ移る朝日もはなのほひにてひかりまばゆき山桜かな」は碑となり、松山市南江戸の山内神社の境内に、また吉平の孝心に感応して厳寒の正月に華を開いた「十六日桜」の由来を記した碑文と短歌「つくしけん人のまことをにほはせてさくかむ月のはつさくらばな」は、現在、御幸

1丁目桜ヶ谷の吉平屋敷跡に建てられている。

略歴

文化9(1812)年 松山城下に生まれる。
明治6(1873)年 皇学所助教となり教務省から中講義に補せられる。
明治12(1879)年6月9日 68歳で永眠。墓所は松山市御幸の千秋寺

(写真提供：井手康夫氏)

〈関連図書〉

- ・愛媛県百科大事典編集委員室『愛媛県百科大事典』 愛媛新聞社 1985年
- ・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 人物』 愛媛県 1989年
- ・井手康夫「歌人西村清臣について」『子規会誌82号』 松山子規会 1999年

〈主な収蔵資料〉…(P219, 103)

〈ゆかりのある場所〉…(P301, 149~150)